

【概要】

ハーンにおける異質なるものの表象

長岡 真吾

ラフカディオ・ハーン（1850-1904）の研究者である牧野陽子は『神々の国の首都』（平川祐弘訳）の「解説」のなかで、ハーンが日本人読者に受け入れられる理由について次のように述べている。「ハーンの叙述には、日本を見る目の暖かさと、外見ではなしにその奥の心までくみとる深い理解力がにじみでており、彼の描く明治日本の風物は魂の郷愁に似た懐かしさを読者に覚えさせ、そこには現代日本人の忘れかけた古き良き日本の姿があるといえる」（387）。しかし、日本からすれば異文化出身であるハーンが、なぜ日本人読者に「奥の心までくみとる深い理解力」があると感じさせるのであろうか。あるいは、そのように読者に感じさせるハーンの記事にはどのような特徴があるのだろうか。

1 "Mujina"における原文の違和感

Kwaidan（1904）に収録されている"Mujina"は、日本語に翻訳された文章を日本人が読む場合と、英語を母語とする人が原文で読む場合とでは大きく印象が異なる部分がある。そのひとつが"O-jochū"という日本語の音の挿入である。夜の濠端で顔を隠して泣く女性に承認の男が声をかける場面で、商人は"O-jochū"すなわち当時若い女性へ呼びかけるときに使用された日本語の言葉をそのまま使っている。ハーンの原文では合計8回、その言葉で呼びかけているが、これは英語圏の読者にしてみれば外国語の"O-jochū"という知らない言葉が繰り返される場面になっている。"O-jochū"という言葉の繰り返しには、したがって一定の違和感を与える効果があったと推測できる。一方、これを日本語に翻訳にすると、当然のことながら「お女中」と訳されることになり、日本語の読者には、英語圏の読者が覚えたはずの違和感が生じない。

"O-jochū"という言葉の使用とそれが生む違和感には、ハーンの明白な意図が感じられる。実際にこうした違和感を生む言葉を文章中に含み込む傾向は、"Mujina"に限らず、"Story of the Futon of Tottori"や"Oshidori"など、ハーンの他の作品にも多く見られる。日本語の音をそのまま英語作品のなかに入れることについてハーンはどう考えていたのか。この問題についてはB・H・チェンバレンとの交換書簡のなかで継続した議論を展開している。それによればチェンバレンとハーンとは正反対の考えを持っていたことがわかる。チェンバレンは、英語の文章の中に理解不能な語が挿入されていると嫌悪を感じる、と明言している。「実際わたくしは、それらの外国語がたまたまわたくしに理解できる場合でも、そうした挿入語が嫌いなのです」と

も述べて、例えば日本人が「あなたのハウスは」などというのを好きになれないと述べている。「そうした言葉は、わたくしの耳にはチクハグな不正音に響く」のだとも述べる。チェンバレンは明らかに違和感を感じ、その違和感を嫌っている（1893年6月10日付ハーンへの書簡。『著作集』15巻、38）。

それにたいしてハーンは、部分的にチェンバレンの主張に理解を示しつつも、次のように述べる：

あなた[チェンバレン]の結論に、わたくしは次のような修正を提議したいと思うのです。すなわち、芸術上の著作中には読者が知らない外国語の単語を入れてはならない。ただしその音等々により、想像力にいちじるしい効果を与え得ると思われる場合は除く、と。（強調はハーン）（1893年6月14日付チェンバレンへの書簡より。『著作集』15巻、45）

ハーンは想像力に訴えかける効果が大きいと思われる場合は、外国語をその音のまま使ってよいと主張し、「たしかに語というものは、もしそれが耳に訴えるものであるならば、想像力にも訴えるでしょうし、訴えるに違いないのです」（同）と力説している。

2 〈世界の響き〉

「耳に訴える」とはどういうことだろうか。それは、耳がある種の違和感を覚える、ということではないか。ただし、その違和感ゆえに耳をふさいでしまうのではなく、逆にさらに耳を澄ましていくような、そんな覚醒をうながすような違和感だと考えられるのではないか。違和感のある外国語の音が、想像力、すなわち新しいインスピレーションに繋がる。このような違和感を説明するのに、「世界の響き」という概念を引き合いに出したい。この「世界の響き」というのは、1928年マルティニーク生まれのフランスの詩人・作家・思想家であるエドゥアール・グリッサンが提起する概念である。グリッサンがいう「世界の響き」について、日本における紹介者のひとりである菅啓二郎は次のように説明している。

...グリッサンの言葉に *écho-monde* というものがあります。トレデュニオン（ハイフン）の前後を入れ替えずにそのまま「反響=世界」といってもいいし、「世界の響き」と訳してもいいでしょう。それはこの世界における、出会う必然性のなかった要素が偶然に出会って作り上げる集合体のことであり、その集合体にぶつかりその響きを聞くことによって、他の人々もまたさまざまな関係の網の目に対する目覚めをうながされる、そんなものだと思います。（『オムニフォン』81-82）

この説明を"Mujina"の例に当てはめて考えてみよう。英語読者は、日常的な英語の文章のなかで突如として"O-jochū"という異質な言葉／音に出会う（日本語に翻訳されると「お女中」という音の違和感は消えてしまう）。この外国語の意味不明な響きに基づいて、英語読者は、一方では当時の日本という東洋の異国を否応なく意識させられたはずである。しかし、その後のくだりで、「顔が玉子のようになる（"... became like unto an Egg"）」という表現が使われる。これは、英語読者がよく知っている玉子と、人間の顔とを重ね合わせる想像を促している。そうして、通常は重なり合わないもの同士が重なり合う恐怖、違和感へと引き込まれる。繰り返される"O-jochū"という異質な言葉の残響のなかで、日本への遠さと近さを、日本語と英語の音が混在する集合体の違和感と親近感とを交互に実感する、そんな「関係の網の目に対する目覚め」を促す体験を、ハーンの"Mujina"は提供しているのではないか。その意味で、"O-jochū"という音を含む"Mujina"は、異質なものが偶然に基づきあう反響しあう「世界の響き」の場に、世界の異なる声が響きあう場所そのものになっているのではないか。

3 〈世界の響き〉としての『チータ』

日本の「怪談」を、世界の異なる声が響き合う場所へとハーンが変えてみせたとすれば、それは来日以前からハーンの文学的特質としてあったといえる可能性がある。同様の傾向を示す例をハーンが最初に上梓した小説『チータ』(1889)に見ることができるからである。クレオール少女が、両親とともに避暑にいった島で大嵐に見舞われ、海に流されたところを、スペイン語を母語とする夫婦、フェリユーとカルメンに助けられる。少女はチータという名前を与えられ、彼らが住む島で暮らし始める。もともとクレオール語を話していたチータは、養父母の言語であるスペイン語を学んでいく。すると、新しい言葉を覚えるにつれて、チータにはそれまでには見えなかった島の風景の細部が見えるようになっていくのである。スペイン語を覚えれば覚えるほど、チータにとって言葉のひとつひとつが風景の細部と直接に結びついていく。そうして細部が何を意味するのかが読めるようになるのと、その細部が「見えて」くることとが連動するのである。ハーンはそれを「学ぶ」という動詞の連続的な使用と、「見えた("Saw")」という動詞の反復的な使用によって極めて意図的に伝えようとしているように読める。「チータは学んだ」という文が4回連続した後で、チータには世界が言葉をとおして次々に「見えて」くるようになる。「チータには見えた」という文で始まる段落が8回も反復される。「見えた」が反復されて強調された独特の文章には、ある共通する特徴が認められる。チータが目にしたものを、チータ（あるいはチータの内面に入り込んだ語り手）が表現しようとするとき、比喩が多用されているという点である。ここでの比喩は単なる修辭的な技法にとどまらない。チータは比喩によって風景のある細部と別の細部とを結びつけ、そうすることによって世界の重なりやつながりを「見える」ようになったと考えられる。それは、チータが異なる音の言葉を自

分の中に取り込むことによって〈世界の響き〉を内在化し、そうすることによって世界との新しい関係性を築いていったプロセスとして解釈することができる。それはハーン自身が、チータのように、例えば違和感のある日本語を取り込むことによって、新しい文学を構築していったプロセスと重なるように思われる。

4 まとめにかえて

ハーンが読者の内面に訴えかける文章を書くことができた理由のひとつは、違和感を生じさせるような異質な言葉を意図的に取り込み、一方では、それによって世界の拡がりそのものを表現し、他方では、その世界の拡がり「自分」との関係性を文章を通じて体験するような文学的な場を構築／提供したからではないか。牧野がハーンに日本の「奥の心までくみとる深い理解力」を読み取るのは、実はハーンを通じた非日本的なるものとの遭遇と差異化を同時体験するというプロセスを経ているからではないだろうか。この仮説をさらに考えていく際に、グリッサンの〈全-世界〉という概念（「想像界は放射し、〈全-世界（トゥ＝モンド）〉の混淆の中で再生される。言葉の混交は我々が使用する言語によって我々に読解可能なものになる。我々の言語使用はもはや単一言語的ではあり得ない」）や、瀬名秀明らが『境界知のダイナミズム』で提起する異文化理解における違和感から「異和感」への転換と相互浸透が重要な手がかりになると思われる。

主な参考文献

- Hearn, Lafcadio. "Chita: A Memory of Last Island." *Lafcadio Hearn: American Writings*. Ed. Christopher Benfey. New York: Lib. of Amer., 2009. 73-148. Print
- . "Mujina." *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*. Boston: Houghton Mifflin & Co, 1904. 77-80. PDF file.
- エドゥアール・グリッサン『全-世界論』恒川邦夫訳、みすず書房、2000年
- 菅啓次郎『オムニフォン〈世界の響き〉の詩学』岩波書店、2005年
- 瀬名秀明・橋本敬・梅田聡『境界知のダイナミズム』岩波書店、2006年
- 長岡真吾「ラフカディオ・ハーンの眼----ハーンの視力と言葉をめぐる試論」八雲会『へるん』第47号（2010）：4-14
- 牧野陽子「解説」『神々の国の首都』平川祐弘編、講談社学術文庫、1990年